



寄り添い
続ける

えにし ▶ 33 ◀

ブック・エンド・ドリームプロジェクト(盛岡)

子どもと本の懸け橋

盛岡市のブック・エンド・ドリームプロジェクト(紺野衆代表)は、東日本大震災で被災した沿岸部の子どもたちに図書カードを贈る活動を続けてい

る。活動資金は、発起人で元県立高教諭の小山卓也さん(80)が着任先で描いた三陸の風景などを表紙紙に用いたノートを販売した益金で賄う。イベント出展やロコミで2冊一組千円(税込)で販売し、約130万円分の図書カードを仮設校舎だった全小中学校延べ17校に届けた。

笑顔が戻るまでやめない」と力を込める。ノートはA5判64ページ。同プロジェクトのホームページから購入できる。問い合わせは事務局の三浦さん(080・1665・7757)へ。



ブック・エンド・ドリームプロジェクトの支援を受け、図書室で読書を楽しむ唐丹小の児童。同校の新しい図書の購入費の大半が寄付で支えられている

2013年に盛岡一高同窓生が都内で開いた白亜芸術祭で被災地支援を呼び掛けたのが活動のきっかけ。当初約20人いたメンバーは、小山さんと医師の紺野代表(61)、会社員三浦満春さん(58)の3人に減った。活動資金の捻出が課題で、昨年同プロジェクト専用の自動販売機を県内に3台設置。コカ・コーラなど1本につき5円を支援金に充てている。14年9月、支援の一環で大槌町で開いたワークショップで、ちぎり絵を作り喜ぶ子どもたちの笑顔が忘れられない。三浦さんは「全国で災害が多発する中、震災を忘れないためにも息の長い支援が大切だ。子どもたちの

なっていると感じる。一方で、気持ちや寄せ続けて賛同してくれる人もいて励みになる」

被災地から 新しい図書うれしい



釜石市唐丹町 唐丹小6年 松木 春陽さん
図書委員長を務めている。学校で年に1回図書まつりがあり、本をたくさん読んだ人にしおりを贈ったり図書委員

が紙芝居を読み聞かせして盛り上がる。新しい本が入ると自分も読みたいし、みんなが借りてくれるのでうれしい気持ちになる。今も私たちに支援してくれる人がいるのは本当にうれしいし感謝したい。

賛同の気持ちで励み

ブック・エンド・ドリームプロジェクトの紺野衆代表(61)に活動の思いや支援の必要性を聞いた。

「聞き手は北上支局・金崎諒(聞き手) 本を通じた支援を始めた理由は、

「自分がそうだったように、1冊の本から人生が変わる経験や夢がもらえる。未来を切り開く子どもたちに図書カードを贈り、読みたい本を読んでもらおうと考えた」

「被災地の現状について」



「支援金は毎年少なくなっているのが現状だ。ただ、毎年贈呈できなくてもやめられないことが大切だと思っている。『忘れない』と『続ける』を合言葉に、細くても長い支援を続けたい」

◇お断り 16日付から新連載「碑(いしぶみ)の記憶」を始めます。